

# 自蹊庵便り

令和三年 長月

NO 152

〔茶事今昔Ⅱ〕

残暑お見舞い申し上げます。

お手許に届く頃には涼しき風が頬を渡る頃にごさいますよう…。

八月の猛暑続く中、東京五千人越えのコロナウイルスとの戦い、世情過酷ながらオリンピックを無事に終え、日本人の御活躍、

金、銀、銅のメダルは、閉じ籠もり余儀なき家々にあつては、いつときの清涼剤であり、いくばくかの活力と成り得たのではないでしょうか…。いえ、いえ、悲喜こもごも大いに活力を養われた方もおられますよう。

オリンピックにしても、コロナウイルス対策にしても、陰での多大な支えあつて、始めて無事という言葉が成就する日々が続いております。何処いずこに向かつて手を合わせ

ウイルスとの未曾有の戦い、人類の英知を信じ、しっかりと前を向いて、やがてこよなく美しい紅葉を愛でる一時を迎えることができそうですよう祈るばかりにごさいます。

そのような中にありながら、今夏も土用の最中、恒例の湿し灰作りを無事終えることができました。

参加者 男性二名、女性四名の六名にて、絶好の湿し灰日よりとはいふものの、三十六度越えの炎天下での作業を繰り返しながら、朝の九時より始まり五時に終了、参加者の皆さん、よく頑張ってくださいました。

お陰様で今年も器量好しの湿し灰が三十キロほど出来上がりました。湿し灰ばかりは、まさに汗と根気との結晶にごさいます。今年より希望者にはお分けすることに致します。別紙にてお分けできる量と価格を掲載しておきますので、御参照くださいませ。

早朝五時半席入りの朝茶も少人数ながら、レギュラーの皆様とそうっと静かに一服の

時をもつことができましたこと、レギュラーのこと、天に、地に、人に、手を合わせるこの一日一日がさらさらと過ぎ逝きます。

さらさらと過ぎ逝く先に見ゆるものは、はてさて何が見えてくるのでございませう…。

茶の湯の文化、利休さん達も残そうと思つて、朝となく、昼となく、夜となく茶事に三昧に明け暮れたわけではなく、ひたすらに日々を生ききる中での茶人達の一服であったことでしょう。文化、文が化けるとはよく云つたもの、先人達の残し置きくれた

ものの、かけらほどもまねをし続け、そして今、ひさすらに真似てきたことから、目から鱗の学びに出会うのも、ほんのかけらほどにごさいます。やり続けてみてこそ出会う茶事の妙味というもの、八十路に手の届く頃になって、ようやくのごさいます。

権力の世界から生まれた茶の湯という世界、真似ることなど出来ようありませんが、水と火さえあれば調う茶の湯であれば、私のような者でもやり続け、柄杓で湯を汲み続けて、美味なる一服に出会いたい、その望みが叶ったときこそが茶事であるまう醍醐味であると思うのです。

その火相と湯相の絶妙なところでの一掬いが調うのはまだまだ先のようにございませぬが、やり続けていくも独り相撲はとれず、良き仲間を支えられての真似び事にございませぬ。

その真似び事での今夏の朝茶も早朝二時過ぎには身支度を終え、そつと音なきよう車の止めよう一つにも気遣いしつつ、無事に終えることができました。

黙々とした働きのうちに早朝の物音は、<sup>ひぐらし</sup> 蝸の声と共に始まり、刻々と明けゆく中のひと雫の露の美しさとしみじみと対峙し、ああ…白露ここにあり…。兼好の徒然草にも朝露のくだりがあつたように思ひます。<sup>いにしえびと</sup> 故 人もこの早朝の夏庭の白露に心を寄せてきたことが忍ばれます。(第七段)

明けゆく朝の光に一瞬の輝きを見せる朝

露は何処にも降りそそぐ、朝庭の暗黙の景色に人々は平等を悟り、つゆと消える一瞬の輝きを人の一生に思いをはせたのではないでしようか…。

この朝茶事という早朝のひと掬い、有難いことにございます。今夏はお若い男性が三名も御参加くださり、嬉しい一服にございませぬ。

朝茶はいつも名水点にいたしますゆえ、梨木神社の水を汲ませて頂いての仕度にございます。この頃では早朝三時〜四時頃の昔で云う寅の刻に汲みにみえる人もいないことから、七時からしか受け付けて頂けないため前日の朝、頂きに上がりました。それでも充分に当たりの軟らかい甘露な水にございました。

また、無農薬で作って頂いている抹茶はまだお薄だけですが、「夏口切り」と称して、新茶を挽いて頂き、一服を楽しみました。あと二〜三年もして土が育ってきたら、無農薬のお濃茶を試みて頂くつもりです。

梨木神社の名水と夏口切りの新茶、この度の朝茶の御馳走にございました。

五〜六名で密やかに夜明け蝸と鳥のさえ

ずり、白露の恵も賜り、贅沢を掬いとるとはこのようなことを云うのであろうか…と、庭のお地藏さんにも今朝は名水一服、どうぞコロナウイルスを鎮めてくださいますように…と、ひたすら皆様の無事を祈念しつつ、大自然の恵みに感謝いたしつつ、令和三年八月、今年の夏もさらさらと流れ過ぎで逝きます。

―なにごともなき世の中に生を受け  
人々の無事を祈る 朝茶事

令和三年盛夏

陰悪なコロナ禍での朝茶に詠めり

鶴 女

日本列島各地での豪雨による

多大な被害、心よりお見舞い

申し上げます。

いずこも浅からぬ御縁を賜り、多くの皆様にお世話になっております。皆様の御無事、御健勝を祈念してやみませぬ。コロナとの抱き合わせの試練、くれぐれも御自愛くださいますよう重ねてお祈り申し上げます。